

日本と中国

② 香港の「雨傘革命」

「雨傘革命」と名付けられた香港学生の街頭占拠運動が始まって、1カ月が経とうとしている。

西側世界は、勝ち目のない闘いを続ける学生たちの純粋さに共感し、民主と自由という普遍的価値を求める彼らの運動に声援を送っている。

しかし、占拠運動で影響を受ける商工業者には、運動批判の声が多い。「金持ちの坊ちゃん嬢ちゃん」に冷ややかな視線を投げつける若者も多い。香港内部の亀裂が浮き彫りになった1カ月でもあった。

◇ ◇ ◇
中国政府の頑なな反応は予想どおりだった。習近平政権は大陸でも民主活動や言論を厳しく取り締まっている。習近平の諸講話を読むと、彼自身の本音は別という気もするが、いまはイデオロギー統制を牙城にしてきた党内保守派のやりたいうようにやらせている印象だ。

香港問題もこの保守派の手中にあるらしいことは、共産党の発表から見とれる。それを象徴するのが「西側敵対勢力が占拠運動を操っている」という決めつけだ。たしかに、米欧のNGOなどが学生の運動を物心両面で支えているのは事実らしいから、「根も葉もない言いがかり」とは言えない。しかし、「証拠を掴んだ」とばかり、陰謀論めいた決めつけをするメン

タリティは、変えようがないのだろうか。

そういって、中国政府は「ただのNGO活動ではない、背後では米国の政府の金で支えているのだ」とでも言うのだろうか。

しかし、同じ判断基準に従えば、中国が世界各地で中国文明を普及し、中国の見方・立場を理解させるために建設している「孔子学院」だって、中国が海外に仕掛ける「敵対行動」だと認定されてしまうのではないか。そういう支援活動は「それは世の常で、お互い様だ」と、鷹揚(おうよう)に構えることはできないのだろうか。

◇ ◇ ◇
6月に国務院が公表した「香港一国二制度」白書もただでない内容だった。「一国二制度」が、いつの間にか「本土は社会主義だが、香港には資本主義を許す」という経済体制だけの二制度になったような書きぶりだったからだ。

大陸の諸都市は、経済・社会の発達レベルにおいては、まだまだ香港に及ばないが、「事実上の資本主義」になっている面は多々ある。「経済市場化」を目指す三中全会改革を推進するとなれば、なおさらだ。

「いや本土経済は、政府

と国有企業が実権を掌握する『国家資本主義』な点が違う」と言う人が居るかも知れないが、香港だって、いまや金融を中心に本土の大国有企業に養われているようなものだ。

だとすれば「政治制度は本土のしきたりに従ってもらおう」と言われた途端、香港は大陸の都市とそう大差ない存在になってしまう。それが「一国二制度」の目指した姿なのだろうか。これでは「一国二制度の正体見たり」と受け取られてしまう。台湾に与えたショックも無視できない。

◇ ◇ ◇
中国政府も中国人も、民主政治に対して極めて冷やかだが、その責任は西側にもある。「ねじれ」国会のせいで毎年首相が替わった日本や低次元の議会抗争のせいで連邦政府の機能停止を招いた米国を見せられては、「民主政治はほんとうに理想か」という疑問が浮かぶのも無理はない。

しかし、中国の仕組みも薄熙来や周永康をのさばらせてしまった。民主選挙に問題があるとしても、中国もいまのままでよいはずはない。本当は「一国二制度」を逆に利用して、香港を別の政治制度の実験場にするくらいの度量を見せてほしいが、「いまは時期が悪い」のだろうか。

香港の学生たちは未熟かも知れないが、彼らが挫折してニヒリズムに走ったり、香港を捨てて異郷で暮らす決心を固めたりする姿は見たくない。せめて「これが最後という訳でもない」と希望を繋(つな)がせるような幕引きは、考えられないものだろうか。

(津上工作室 代表・津上俊哉)

薄れゆく「一国二制度」